

「大地の如き母」をとりもどさなければ

花崎 みさを

養護施設「野の花の家」園長

日本が難民条約を批准した1981年の3月に、にわかに私は母親になった。それも17歳の少女の、である。そして次々に9人の子の母親（インドシナ難民の子どもの里親である）となり、泣き笑いの生活の中で、「親」とは何なのだろうと考え続けた。

6年前、養護施設「野の花の家」を作り、家庭で養育してもらえない子どもたちの「親代わり」「家代わり」をしながら、「母」の役割の重さについて、考え続けた。

母の胎内から、十月（とつき）で、未成熟な個体として外界に出現する“赤子”は、未成熟なるが故に、外界でも“母の胎内のような安定した環境”を必然的に求める。暖かく包み込むような、身をゆだねるとゆるやかに揺れるゆりかごのような、悠久の宇宙に連なっているような深い実感の中で、3年もするともう、赤子は大人のような完成した機能を身につける。後は周囲を貪慾に取り込んで知恵を磨き、人格を形成していくというのが成長の過程である。

この過程は大古の昔から変わらず、「母なる大地」に人が生き続ける限り続くと信じられてきた。しかし、この辺が少し、いや大分おかしくなってきたと、この10年余の子育ての中で私は痛感している。

生活に窮していても、しっかりとこの原則の中で育ったアジアの子らは、海を超えて他国で暮らしていても、人としてのたくましさ、優しさを失わない。それに比べて、この原則を体験していない多くの日本の子どもたちは、どこかお

かしい。愛され、大切にされた体験のない子らは人への関心が薄く、心の通じ合いに疎い。自分に甘く、他人に冷たい、自立も共存も不可能な人間に育ってゆく。

「生みたくなかった」「育て方がわからない」「可愛く思えない」「疲れるからいや」「育てたくない」……こんな母親が年を追うごとに増えているのである。そしてやがて子どもを置いて家を出る母親、途方にくれて子どもを放置し、虐待し、金や物漬しにする父親。その結果、栄養失調、被虐待、非行などで住む家さえ失って児童相談所を通して子どもたちは養護施設に来る（大半は地域に残り、一部は他種施設に送られるが）。その子どもたちは、当然のように底なしの愛を我々に求める。しかし、乾ききってヒビ割れた心に、どれだけの愛を注いだら潤ってくれるのだろうか。我々は母の胎内の再現を、まだまだ、まだまだと試み続ける日々である。

親、母親（代理も含めて）の役割は、まず暖かく安定した環境の中で、包むように愛し、可愛いという思いを目いっぱい表現し、自分と他の人間との思い合いを体得させることではないだろうか。教えなければならぬことは数々あるが、まずは「愛されているという実感」が、人への思いやりを生み、自分を厳しく見つめる芽を育むということを、心に止めておかなければならないと思う。

大気汚染、環境破壊、「文明」の進む中で、ひ弱に歪んでしまった母たちの姿が哀しく胸に焼きついている。